昴
Subaru
男声合唱団
ニュースNo.４００
'12. 1. 21

祭典・制作協力金
昴・現在　３０５，０００円です。
（目標　６００，０００円）
２月中に目標を達成したい。

7．15　昴コンサート延期

1．20

□１月２０日（日）レッスンに先立つ午前中に運営委員会が開かれ、７月１５日（月・祝）に決まっていた「昴９ｔｈコンサート」（仮称）を、参議院選挙が７月２１日に控えている折からレッスンの出席もままならぬ団員が多いことが予測され、また、新曲をマスターすることや新入団員にとっては全ての曲が新曲であることに対し、練習時間が少ないことも考慮して、**来年の２～３月に延期**することに、論議を重ねた上で結論しました。

□したがって、**強化レッスンも延期**とし、当面の予定は中止しますので、ご注意ください。予定表を修正したものに差し替えますので、お手持ちを差し替えるようお願いします。

□例年と比べ、日程変更になったのは、**「昴・総会」**は８月末、昴・**団内コンサート**は「日本のうたごえ祭典・おおさか」が終わってから、１２月末の予定です。

□発足プロジェクトから**「男声合唱団昴友の会」**のお誘い文と会則が議題に上げられ、この線で発足を図っていくこととなりました。

□その他議事は配布の「運営委員会　メモ」をご覧ください。

1．20

ドナウ、降りつむ、音戸の舟唄をレッスン

□１月２０日（日）の定例レッスンは奥村さんの体操にはじまり、檀先生のヴォイストレーニング、本並先生の指揮、森さんのピアノで、「美しく碧きドナウ」、「降りつむ」と「音戸の舟唄」をレッスンしました。新入団の吉川さん、見学に見えた山根さん、ひさしぶりに参加の富樫さんを加え、全３３名でした。

□「美しく碧きドナウ」の歌詞づけ、４ページ上段、「微笑をなげながら」は、歌詞印刷通り、「びしょうをなげながら」と歌います。

□「降りつむ」；しんどい曲は後で味がしみ出してきます、と本並先生。ＣＤ音源を聞きに聞いて、頑張ってみましょう。（次ページに、若園さん投稿の資料を載せました。）

□「音戸の舟唄」；音戸の瀬戸の急流をのりきる迫力が出てきました。

投稿；若園達雄（Ｔ１）　早速調べていただきました。ありがとうございました。

降りつむ　永瀬清子作詞　林光作曲

永瀬清子　明治３９年生まれ、平成７年(１９９５・８９歳)没

「降りつむ」は清子の第四詩集「美しい国」に入れられた詩である。１９４５年（昭和２０年）の夏に敗戦を知らされた清子は空しさとともに安堵と開放感を味わった。が、空襲で廃墟となった町で人々は飢え、戦場で生き延びて帰国しても職のない復員兵の犯罪が相次いで報道された。１０月末には、岡山市にも占領軍約５０００人が進駐して、焼け残った市街や後楽園をわがもの顔に闊歩する占領軍兵士の姿が見られるようになる。窮乏から逃れる手だてを持たぬ女たちが派手な服装で彼らを相手の街娼となって夜の街に表れた。が、何よりも心を疼かせたのは、６月の岡山空襲で家族を失った戦災孤児たちだった。駅舎の片隅や地下道を住み処にした。通行人に食べ物を乞い、店の物をかっぱらって追われながら生き延びた。空襲の猛火から着の身着のままで逃げてきたこの子らは、冬になると凍えた。４人の子持ちの清子の胸は疼くが彼女自身、この子らに手をさしのべる余裕はない。初めて経験した敗戦国のもっとも酷薄な現実だった。屈辱の日々を過ごす大人たちの心情が彼らの姿に重なった。

金沢育ちの清子にとって雪はなつかしくやさしい。「悲しみを糧として生きよと雪が降りつむ」、「泣き叫びの心を鎮めよと雪が降りつむ」のである。戦中の言論統制から自由になった今こそ、詩人として人々の心を癒したいと清子は思う。

参考；「女性史の中の永瀬清子・戦後篇」井久保伊登子　ドメス出版 2009
「永瀬清子とともに」藤原奈穂子　黒潮社 2011

永瀬清子の略伝（インターネット検索により、編集子作成）

岡山県生まれ。父親の仕事の関係で２歳から１６歳まで金沢、後に愛知県に移り、愛知県立第一高女卒業。結婚後、夫の転勤に伴い、大阪、東京と住み、清子３９歳の昭和２０年岡山に戻り、直後、６月に岡山市大空襲、同年１１月に復員した夫と４人の子どもと共に母親のいる生家に移り、農業に従事する。

学生時代に「上田敏詩集」を読んで詩の道を志す。佐藤惣之助に師事、東京では「時間」(北川冬彦主宰) 同人となり、高村光太郎や柳田国男らの知遇を得て詩作に没頭し、宮沢賢治の研究にも力をいれた。宮沢賢治追悼会に出席した人々と、賢治の遺した鞄から偶然「雨ニモマケズ」を発見し、これが賢治の代表作として世に出ることになった。

岡山に帰郷して「日本未来派」同人、「黄薔薇」主宰。第一詩集「グレンデルの母親」(1930) を皮切りに、「美しい国」(1930)、「薔薇詩集」(1958)、「永瀬清子詩集」(1979) 他多数。赤松常子賞（69 歳)、勲５等宝冠章（70 歳)、中国文化賞（71 歳)、山陽新聞賞（74 歳)、岡山県詩人協会会長（76 歳)、三木記念賞（80 歳)、地球賞（81 歳)、ミセス現代詩女流賞（82 歳）受賞。

繊細な比喩（ひゆ）法が冴える詩が多い清子を「肯定の詩人」と評した人がいる。とかくネガティヴに流れる現代詩の中にあって、毅然として前を向いていた。人間賛歌の漂う作風だと。清子が「読んでいただいた皆さんが元気の出るようなものを書いている」と言っていたのを彼は覚えている。

後進の育成にも熱心で、同人だった女性は、「誰にでも平等に接し、良い詩は推薦して賞をとらせ、自分が賞をとるのは遅れてしまったような人でした」とその人柄を評する。

まだハンセン病への差別も生々しい４９年、瀬戸内市の長島愛生園の療養者に詩の指導を始め、４０年間にわたって交流したのは特筆すべきことだが、戦争体験はまた、清子の詩的感性をいたく刺激した。戦後は岡山の地にとどまりつつ、民主主義や平和の問題、女性問題などに熱心に取り組んだ。詩壇での輝きも失わなかったけれど、傑女然たる風貌はなく、素顔は普通の母で、おばあちゃんで、大詩人らしからぬ大詩人だった。

檀美知生第５回テノールソロリサイタル
・私の好きなこの街コンサートＩＮ関西
毎日新聞に『阪神大震災１８年』として大きく掲載されました。

毎日新聞１月１９日朝刊

阪神大震災 18年

毎日新聞（1月19日 朝刊）（2013年）

歌の力で支援

西宮でコンサート

岩手の震災遺児 映像で登場

430人「あの日」思い聴き入る

被災者を歌の力で支援するコンサートが17日夜、西宮市高松町の県立芸術文化センター小ホールであった。阪神大震災後に生徒の心のケアにあたった元中学教諭の村嶋由紀子さん(65)＝芦屋市＝らが企画。東日本大震災後に出会い、交流を続ける東北の震災遺児らのメッセージ映像も披露され、約430人の聴衆は「あの日」に思いをはせ、目を潤ませていた。

コンサートは復興支援を目的に、村嶋さんが夫で声楽家の紀久男さん(66)らと95年秋から毎年開催している。

村嶋さん夫妻は、東日本大震災後には岩手県陸前高田市を訪れ、仮設住宅や中学校などでこれまでに6回公演した。今回は女声アンサンブル「アモーレ」（芦屋市）などの合唱団も出演。日本歌曲やミュージカルなどを披露したほか、村嶋さん夫婦が復興をテーマに作った「いつだってスタートライン」などのオリジナル曲も熱唱した。

また、交流を続ける熊谷海音(かのん)さん(9)＝同県陸前高田市＝ら津波で両親らを失った遺児がビデオ映像で登場。一緒に出演したミュージカル公演や同市にある「希望の灯(あか)り」を訪れた様子などが映され、最後に海音さんらは「私たちは頑張ります」と笑顔とともにエールを送った。

村嶋さんは「子どもたちの笑顔は復興を目指す被災地の希望。来年は一緒に関西でステージに立ち、二つの被災地に届くように歌声を響かせたい」と話していた。【藤顕一郎】

コンサートで披露されたビデオ映像で、「私たちは頑張ります」と語る海音さんら＝西宮市の県立芸術文化センターで

2013.1.18 毎日新聞(夕刊)

〔第３種郵便物認可〕 毎 日

前向く君 遺児の希望

母犠牲エッセーつづった生徒

阪神大震災以来、被災者を歌声で励ますコンサートを続けてきた元中学教諭が17日夜、震災で母を亡くした教え子の男性に17年ぶりに再会した。当時、男性が思いをつづった文に心を動かされ、曲をつけて阪神と東日本大震災の被災地で歌い続けてきた。「あなたの言葉が私の背中を押してくれた」。そう感謝した元教諭は、男性から2児の父親になったと聞かされ、改めて感動の涙を浮かべた。【藤顕一郎、米山淳】

阪神大震災 18年

再会したのは、神戸市立本山南中の元教諭、村嶋由紀子さん(65)＝兵庫県芦屋市＝と会社役員の宮地成年さん(32)＝同県宝塚市。

震災当時、宮地さんは同中2年。神戸市東灘区の自宅が全壊し、母照子さん(当時46歳)を亡くした。スポーツが得意で活発な生徒だったが、震災後は元気をなくし、授業中もぼんやりすることが増えた。同様の生徒は他にもおり、村嶋さんは気持ちを整理するために、震災を各自のテーマでまとめる「震災新聞」を書くよう生徒全員に提案した。

宮地さんは最初、母の死に触れられなかった。がれきの下から聞こえた母の最期の言葉は「あと5分で死ぬ」。ショックが大きすぎて、書けなかった。だが、村嶋さんに促され、悲しい時に思い出す父の言葉を「思い出すことば」と題するエッセーにした。村嶋さんは「絶望の中でなんとか前を向こうという宮地君の思いが伝わった。その後、肉親を亡くした生徒と接する指針にした」と振り返る。

村嶋さんは夫の声楽家、紀久男さん(66)に作曲を頼み、復興支援コンサートで歌い続けた。東日本大震災の被災地でも支援コンサートを開き、宮地さんと同じように親を亡くした東北の遺児らと一緒に歌った。「みんなが前を向いたら周りの人も元気になるよ」。そう励ましながら。

兵庫県西宮市でのコンサート後、「立派になったね」と目を潤ませる村嶋さんに、「先生は変わりませんね。感動しました」と宮地さん。携帯電話に保存していた5歳と3歳の娘の写真を見せ、「僕の家族です」と笑顔で報告すると、村嶋さんは「かわいいね。命はつながっていくんだね」と涙を浮かべた。

村嶋さんは「震災でお母さんを失ったあなたが家族を持ち、立派に暮らしていることは東北の遺児たちの希望になるはず」と語り、宮地さんは「自分が役立てるのなら、経験を伝えていきたい」と誓った。

◆宮地さんのエッセー◆

「思い出すことば」

学校の帰り、電車を待ってるとなぜかかなしくなるときがある。なんで大阪からかよわなあかんねんと思うときもある。でも、そんな時に思い出す言葉。「おまえ、かわいそうやなぁと言われるより、おまえがんばっとうなぁと言われるほうがええやろ」だ。

被災者、歌で励ます 元教諭 17年ぶり再会

阪神大震災翌年の卒業後、17年ぶりに再会した宮地さん（左）と村嶋さん＝兵庫県西宮市の県立芸術文化センターで17日午後9時6分、米山撮影